

契丹国（遼朝）時代の陶枕について －陶磁器における唐宋時代の継承と断絶－

町田吉隆*

A study of the ceramic pillows in the Kitai -Succession and break between the Tang and the Sung period

Yoshitaka MACHIDA*

ABSTRACT

We are able to find out an unique style in the Kitai(契丹) Pottery. There is a theory which has been generally called. These styles are similar to the pottery in the Tang Dynasty(唐朝) rather than the pottery in the Nothern Sung Dynasty(北宋朝) of the same era(A.D.10-12c). In other words, the style of the Kitai pottery is the border character. Is its character of the Kitai pottery which has been expressed concretely? This paper will survey one of characteristics of the Kitai pottery. It's checked taking the Pillows of the pottery for instance.

Keywords : pottery, Kitai, China, history

1. はじめに

現行の高校教科書において、唐代と宋代における文化の相違点を説明する際に、陶磁器を例として取り上げているものがある。たとえば「唐代を代表する陶磁器の唐三彩と、宋代を代表する白磁・青磁をくらべてみると、色彩豊かで具象的な唐三彩に対し、宋の白磁・青磁はすっきりした理知的な美しさをもっている。それは、外面的な装飾をそぎ落とし、ものごとの本質に直接せまろうとする宋代文化の特徴をあらわしている。」(木村・佐藤・岸本 2012) という内容である。他にも唐代においては「唐三彩」が取り上げられ、「華やか、貴族的、国際的」な社会の象徴として、宋代においては白磁(定窯)や青白磁(影青・景德鎮窯)が大量に生産され、「簡潔清廉、士大夫的、経済的な発展」が説明される。

陶磁器における唐宋変革をポリクロームからモノクロームへの嗜好の変化と捉えることは日本の陶磁器研究の中でも指摘されてきたし(佐藤雅彦 1978)、また宋代 10 世紀以降の変化を「士大夫の時代、庶民文化の隆盛」から説くことは歴史学・美術史学双方の共通認識でもあった(愛宕松男 1987、矢部良明 1992)。その

* 一般科 教授

中で、戦前には「宋三彩」と呼ばれたが、実際には 12 世紀以降、金朝支配下の華北で盛行したポリクロームの陶磁器は「北方騎馬民族の好み」が反映されたものと説明され、例外的現象とされることもあった(佐藤雅彦 1978)。

報告者は契丹国(遼朝)の陶磁器について学習する過程で、契丹国の絵画(主には壁画を資料とする)が同時期の北宋支配下のそれに比べ、「周縁性」を有するという見解(小川裕充・弓場紀知 1998)に触発され、陶磁器においても、そのような傾向が見られるかどうか検証を続けている。この報告では唐代 8 世紀より継続して華北で生産されていた器種(form)である陶枕を取り上げ、契丹国(遼朝)における陶枕と対比することで、唐代と宋代における陶磁器史における変容の実相と契丹国(遼朝)の「周縁性」について考えてみたい。

2. 唐代の陶枕

報告者が初めて陶枕という器種を見たのは 1984 年に大阪市立東洋陶磁美術館で開催された「楊永徳収蔵中国陶枕」であった。同展図録に所載の「中国の陶枕－唐より元へ」において三上次男氏は初・盛唐(7 世

紀初~8世紀前半)の陶枕について「この箱形の器具は、ほとんど広義の唐三彩か絞胎磁に属しており、前者は白地の上に型押しされた(印花)宝相華・唐草・小花繋ぎなどの植物文、幾何文、鴛鴦その他の鳥・獣文などの文様と、緑彩・燈黄彩・藍彩などはなやかな三彩釉のおりなす色彩の組合せとによって飾られており、また後者は白土と褐土の練りあわせによって生じる木理文の上をさらに黄釉や三彩釉葉で彩っている。」と説明されている。



図1. 三彩筐形品(東京国立博物館蔵)

これらの上面の長さ11-13cm、高7-10cm程度の器については、直方体に近い筐形品(図1)と上面を凹状に湾曲させ、底面は釉葉を施さない露胎の2つの器種に分けられることが近年の研究で判明した(神野恵2010、亀井明德2013)。このうち、後者がやや大ぶりになって、中・晩唐(8世紀後半-10世紀初)、特に9世紀以降、箱形陶枕の型式(type)が定着していく。前者の用途についてはさまざまな議論があるが、ここでは枕としての機能が継承されていく後者について話を絞りたい。

中唐の人、沈既濟の『枕中記』(『文苑英華』巻833)には

翁探囊中枕以授之曰、子枕吾枕當令子適如志。其枕青瓷竅其兩端、生俛首就之見其竅。

と記されている。青磁とあるが現在見ることができる所蔵品例から類推するに、緑釉の低火度鉛釉陶の陶枕がモデルであったと思われる。陶枕の内部は空洞になっており、底面もしくは側面(背面が多い)に空気穴が開けられている。携帯可能な日常用品として、すでに8世紀後半には陶枕が生活の中に普及していたことが伺える。この話は「邯鄲の夢」として有名であるが、後、宋代には磁州窯が成立する河北省南部に近い陶磁窯では、河北省の邢州窯(河北省邢州市)と河南省の黄冶窯や白河窯(河南省鞏義市)において陶枕の生産が確認されている。特に黄冶窯では近年の調査により、三彩をはじめとする低火度鉛釉陶の陶枕が多く生産さ

れていたことがわかった(河南省鞏義文物保護管理所2003、奈良文化財研究所2003、奈良文化財研究所2006、飛鳥資料館2008)。

9世紀以降、陶枕は長沙銅官窯(湖南省長沙市)や黄堡窯(陝西省銅川市)でも生産され、特に前者では大量に生産されており、同時期には黄冶窯と共に主要な産地になっていた。また越窯(浙江省寧波市など)の諸陶磁窯でも生産が確認されている。



図2. 緑釉兔形枕(長沙銅官窯)

9世紀以降の陶枕には形象座脚枕が現れることも特筆される。象や獅子、虎、兎などの動物をかたどった上に枕面を載せる形態である(図2)。これは『旧唐書』巻34五行志に載せる辟邪のための枕を陶磁器で表現したものではないか、と思われる。

韋庶人妹七姨嫁將軍馮太和權傾人主、嘗爲豹頭枕以辟邪、白澤枕以辟魅、伏熊枕以宜男。楕圓形や如意頭形に変容していく箱形陶枕と共に二つの主流な型式として定着することになった。

3. 五代・北宋時代の陶枕

10世紀前半、五代・十国の時期には引き続き、長沙銅官窯や越窯で陶枕の生産が続けられた。特に越窯では形象座脚枕に怪獣を配置するものが見られる。唐代以来の辟邪枕の性格がより強調されたようである。

北宋時代以降、陶枕の型式は多様化する。従来の箱形陶枕は楕圓形、腰円形、如意頭形など丸みを帯びるものと、長方形や束腰形など角隅を強調する形態に分かれる。また形象座脚枕には、枕面を広げ座脚をシンプルにしたもの(如意頭形台付枕、図3)と童子像や婦人像を座脚とする型式が現れた。また獅子や虎、童子など形象そのものの背面を枕面とする形象枕も出現した。

これらの陶枕は景德鎮窯(江西省景德鎮窯)や黄堡窯が発展した耀州窯(陝西省銅川市)など青白磁や青磁を焼造した陶磁窯でも作られたが、多くは磁州窯(河北省邯鄲市)に代表される現在の河北省南部、河南省

北部、山西省、山東省、安徽省の一部にまたがる磁州窯系陶磁窯群で生産された。

張耒『柯山集』卷十「謝黃師是惠碧瓷枕」では、鞏義県で作られた陶枕で夏の夜の炎暑を避けることができるが、老いて眠りが浅いと嘆く。

鞏人作枕堅且青、故人贈我消炎蒸。持之入室涼風生、腦寒髮冷泥丸驚。

夢入瑤都都玉城、仙翁支頤飯未成。鶴鳴月高夜三更、報秋不勞桐葉聲。

我老耽書睡苦輕、遶牀惟有書縱橫。不如華堂併玉屏、寶鈿斜雲髻傾。

（武英殿聚珍版集本）

張耒の生没年（1054年－1114年）から考えると11世紀末から12世紀初めになお鞏義で焼造を続けている窯場があったことが推測される。



図3. 白地黒花如意頭形枕（静嘉堂美術館所蔵）

同時期の女流詩人である李清照も「笑語檀郎、今夜紗幮、枕簟涼」（「采桑子」、詞牌「攤破浣溪紗」）や「佳節又重陽、玉枕紗幮、半夜涼初透」（「醉花陰」、共に『漱玉集』所収）と詞中に陶枕を涼夜の風趣として述べるし、歐陽脩は王安石が陶枕は夏の午睡に効用があると述べたと記す。

介甫嘗云。夏用昼睡方枕爲佳、其何理。云睡久氣蒸枕熱則轉一方冷處。

（『試筆』百川學海本）

前者は廬陵の、後者は臨川と共に江南西路（現在の江西省）の出身ではあったが、鉅鹿県（河北省邢台市）からは「崇寧二年新婿」「長命枕」と記した如意頭形台付枕（崇寧二年は1103年）が出土しているから、華北も含む全国で用いられていたことがわかる（李詳者、張厚璜 1923）。読書人の間では風趣のある器物として受容されていたのであろう。後、明代の『考槃餘事』では副葬品として用いられたものとして認識されており、この間に生活の中で用いられる道具としての陶枕に対する認識は大きく変容したと考えられる。

4. 金代・南宋時代以降の陶枕

袁豊氏の編年によれば、磁州窯系では北宋時代には線彫り（剔刻）や白地掻き落とし（剔花）など工程数の多い技法が用いられたが、時代が下がるにつれて、スタンプで文様を印刻する技法（印花）や特に鉄絵具で釉薬の下に文様を描く技法（鉄絵）が増加するとされている。磁州東義口村窯のように鉄絵の陶枕を多く、生産していた陶磁窯もあれば、河南省新安県窯のように鉄絵技法の例が見られないところもある。また14世紀以降に見られる白地鉄絵の上にコバルト釉をかけて、他の陶磁窯では類例が無い翠青の陶磁器を焼造していた禹県扒村窯（河南省）など、陶磁窯の生産活動期指標ともなる。



図4. 三彩詩文枕（白鶴美術館所蔵）

12世紀半ば、磁州窯系陶磁窯の多くが金朝の支配下に入った時期には花鳥画や詩文、風景などが鉄絵で自在に描かれるようになる（図4）。図録などで最も取り上げられるのがこの時期の陶枕であり、日本を含む各地の所蔵品にもその数は多い。

南宋の支配下では吉州窯（江西省）でやはり鉄絵の陶枕が多く生産されたが、同時期に活発に生産しており、貿易陶磁として日本でも出土例の多い龍泉窯系（浙江省）の陶磁窯では出土陶磁片や所蔵品もほとんど例がない。また至治3年（1323）以降に遭難した韓国新安沖の元代沈没船（京都・東福寺の荷札も確認されている）に景德鎮窯の青白磁婦人座脚枕が見られるが、12世紀以降の出土品や所蔵品には類例が少ない。

明代16世紀後半の人、屠隆の『考槃餘事』巻四、枕の条に

舊窰枕。長二尺五寸、闊六寸者可用。長一尺者謂之尸枕、乃古墓中物。雖宋磁白定亦不可用。

（龍威秘書本）

盗掘された陶枕が骨董として流通していたことを示唆するが、これは同時代には風趣を帯びた陶枕が生産されていなかった事情も伺わせる。清代19世紀初めの藍浦『景德鎮陶録』巻十には、

昔尚瓷枕、暑月用之必佳。今鎮只有孩兒枕。として、陶枕の生産・使用が廃れていたことを記している。

もちろん陶枕そのものは現在も中国において、土産物などとして製造・販売されているが、唐代8世紀以降続いた陶枕の生産は14世紀以降には10世紀から13世紀にかけて生産の中心であった華北の磁州窯系陶磁窯を含めて衰微してしまったことは確かなようである。

5. 契丹国(遼朝)時代の陶枕

中国遼寧省および内蒙古自治区の博物館、文物保存機関を訪問すると、その所蔵陶磁器の中に陶枕がよく見られる。

その型式は方形の台座に方形凹面状の枕面を載せ、側面に文様が施され、枕面は無文か花卉文が印刻される。高さ8~11cm前後、枕面長15~20cm前後、枕面幅8~12cm前後、底面は長さ、幅とも1~3cm短くなる。ほぼ、この型式のみである(図5)。

遼寧省博物館所蔵の白地鉄絵虎枕を契丹国(遼朝)時代に比定する図録もあるが、形象虎枕は他に例を見ず、金代まで時代を下げる、あるいは枕と異なる用途、獣座である可能性も検討する必要があるように思われる。



図5. 白釉方形枕(遼上京博物館所蔵・中国内蒙古自治区巴林左旗)

出土品のうち、調査報告で確認できるものとしては、
①内蒙古自治区通遼市二林場遼墓出土の白釉方形枕前後の側面に仙人騎鳥と雲文と草木文、左右側面に舞踏仙人を印刻(陽刻)。

(張柏忠「内蒙古通遼県二林場遼墓」『文物』1985-3、pp.56-62)

②河北省尚義県囿圖村石棺墓出土の白釉方形枕前後の側面に花卉文と伏鹿文、左右側面に双蝶文を印刻(陽刻)。型式や釉薬と胎土の剥離の状態などは河北井陘窯(河北省石家庄市)に類似しているが、枕面の張り出しと側面や枕面の文様装飾は全く異なる。

③内蒙古巴林右旗和布特哈達墓出土の黄釉方形枕

側面四方に菊花文を印刻(陰刻)して、底面を除く全面に黄色釉を施す。

(趙連季「遼代黄釉菊花枕」『内蒙古文物考古』2000-3、p69)

④内蒙古札魯特旗浩特花遼代壁画墓出土の緑釉方形枕の残欠

施釉は白釉か黄釉、緑釉の単色であり、これは実見できた所蔵品も含め共通している。色釉を合わせる三彩釉の陶枕は見られない。

(中国社会科学院内蒙古考古研究所内蒙古工作队ほか「内蒙古札魯特旗浩特花遼代壁画墓」『考古』2003-1、pp.3-14)

契丹国(遼朝)統治下の陶磁窯で陶枕を焼造していたことが確認されるのは赤峰缸瓦窯(内蒙古自治区赤峰市)と北京龍泉務窯(北京市門頭溝区)である。詳細な発掘調査報告のある北京龍泉務窯の出土状況は以下の通りである。

◇二期(11世紀前半)

未施釉、低火度素焼された長方形枕の残片で、側面には櫛齒文で区画した中に牡丹文を印刻(陽刻)している。報告書では三彩陶枕の半製品と推測している。

◇三期(11世紀後半-12世紀初)

13点の陶枕片が確認されており、うち8点の長方形枕は完形への復元が不可能であるが、側面に手に持つ棒に瓢箪をぶら下げて座る人物が印刻(陽刻)されているものがある。残長10cm。他に枕面に芍薬文、牡丹文を印刻(陽刻)した残片もある。

2点は蓮形枕面台付枕の残片。3点が凹状枕面方形枕(報告書は元宝枕と記す)の残片で池水面に魚が跳ね、蓮花が水面上につきだしている様子を印刻(陽刻)している。

いずれも素焼きの状態、完成後の釉色はわからないが、墓葬出土、所蔵品の凹状枕面方形枕と類似している。また文様に脱俗、仙界を思わせるモチーフを用いている点も特徴的である。

◇四期(12世紀)

13点の陶枕片のうち、7点は復元不可能な方形枕片で区画された枕面に蓮花文が線彫りされている。いずれも未施釉。2点は角の丸い緑釉方形枕の残片で牡丹文が線彫りされている。4点の残片は蓮花形枕面形象座脚枕として復元可能で、座脚は円筒に亀四匹が背中合わせに座る上に枕面を載せる形態である。形象座脚枕ではあるが鞏義三彩枕や長沙銅官窯のそれとはかなり異なる。枕面には蓮葉文が線彫りされるが未施釉である。

四期は金代に属すると考えられるので、北京龍泉務窯では少数の蓮形枕面台付枕が確認される以外はいずれも長方形枕、特に復元可能なそれは凹状枕面方形枕(元宝枕)であった。

資料数の不足は否めないが、墓葬出土品や各所蔵品の凹状枕面方形枕（元宝枕）は文様の印刻（陽刻）、モチーフなどから 11 世紀後半－12 世紀初と比定できるであろう。彭善国氏は五代後梁墓出土の陶枕との比較から 10 世紀前半に比定しているが（彭善国 2003、p176）、その生産時期を下げて考える必要があるように思う。釉薬の状態における類似を指摘した先述の河北井陘窯に多くみられる型式を裴豊氏が 11 世紀後半－12 世紀初に編年していることもそれを裏付けるであろう（裴豊 1980、pp.82-83）。

しかし、河北井陘窯はもとより同時期の北宋磁州窯系陶磁窯では多種多様な技法、型式が用いられており、それらの影響は陶枕に関する限り、契丹国（遼朝）の陶磁器には見られない。

6. むすび

契丹国（遼朝）時代の陶枕の特色をまとめてみる。

- ① 白色釉、緑釉、黄釉の単色の凹状枕面方形枕が多く、蓮花形台付枕が見られる。
- ② 枕面は無文か花卉文を印刻、側面には人物、池、蓮、瓢箪、魚、鳥などを印刻、いずれも印刻で文様を描く。特に側面は陽刻で神仙的とも言えるモチーフが描かれる。
- ③ 唐代の陶枕との関連では方形小型枕という型式を継承しているが、やや大きくなっており（最大長 20cm）、枕面の湾曲・張り出しも大きい。9-10 世紀以降に盛行、北宋時代にも継承された型式である形象座脚枕は見られない。
- ④ 同時代の五代、北宋時代に磁州窯系陶磁窯で焼成された如意頭台付枕や腰円枕など多様な型式が発達した。枕面最大長が 25cm 以上になるような陶枕も現れるが、これらは隣接していた契丹国（遼朝）の世界では例を見ない。また同時代の磁州窯系では白化粧土を掻き落としたり、鉄絵具を充填したりする彫刻的な技法が多く用いた「白と黒」のコントラストが流行するが、唐代に盛行した低火度鉛釉陶器を陶枕を含めて焼造していた契丹国（遼朝）時代の陶磁窯とは大いに異なっていた。
- ⑤ 金朝支配下の華北で陶枕生産は再び緑釉や黄釉を用いるようになり、鉄釉から作られる黒や朱色と共に、ポリクロームの時代を迎える。ただし、低火度鉛釉陶器という点では共通するものの、契丹国（遼朝）時代の陶枕と 12 世紀以降の陶枕の間には継承関係は観察されない。

中国陶磁史上の唐宋時代における画期について、大勢としては還元焰焼成する青磁や青花に主流が移っていくことはあったが、10 世紀以降も華北を中心に酸化焰で焼成する陶磁器、特に低火度鉛釉陶器が晩唐・五代、北宋・契丹国（遼朝）、金朝・南宋時代にも継続し

て生産され、使用されていた。ただし、陶枕という器種に限って観察してみても、これらの地域間の相互関係・前後の時代における継承関係は明瞭とは言い難い。たとえば、9-10 世紀の唐代に盛行した唐三彩の形象座脚陶枕と金代 12 世紀に現れる形象虎枕を、契丹国（遼朝）の陶枕がつなぐ要素はなさそうである。

また「周縁性」の問題に関しても、長江中流域の長沙銅官窯（湖南省）の影響を受けて、上流域の邛窯（四川省邛崃市）でも方形陶枕を作るようになり、北宋初めまで継続したような関係は「周縁性」として説明できるであろう。鞏義諸窯（河南省）の三彩陶枕と契丹国（遼朝）の陶枕との間には具体例に基づく継承関係を今回は見いだせなかったが、契丹国（遼朝）の低火度鉛釉陶器の淵源は、唐代以降の河南・河北の陶磁窯に遡って考えていくより方法が無いように思われる。工人が移動することによって生産技法と共に陶磁器の様式（style）にも影響が生じるだろう。ただし契丹国（遼朝）の陶枕に限って言えば、「周縁性」というよりは断絶したところに、独特の様式を生み出したようである。

陶枕のうち、完形を保つ所蔵品の多くが墓葬からの出土品であったと思われる。しかし遼墓からの出土例は他の器種に比べ多くはない。宣化遼墓など残存状況の比較的良好な墓葬からの出土例も少なく、副葬されることが少なかったことも想像される。では、どのような階層の人々が、どのように使用していたのか。まだわからないことは多く、大方の示教を請う所以である。

参考文献

- 李詳耆、張厚璜 1923『鉅鹿宋器叢録 第 1 編』天津博物院、第三十三葉
- 黒田源次、杉村勇造 1966『遼の陶磁 陶器全集 14』平凡社
- 杉村勇造 1974『遼の陶磁 陶磁体系 40』平凡社
- 佐藤雅彦 1978『中国陶磁史』平凡社
- 裴豊 1980「Freedom of Clay and Brush through Seven Centuries in Northern China: Tz'u-chou Type Wares 960-1600 A.D.」Indianapolis Museum of Art
- 馮先銘他 1982『中国陶瓷史』文物出版社
- 蕭湘他 1982『長沙銅官窯』上海人民美術出版社・美乃美
- 村上哲見 1984「陶枕詞考」『奈良女子大学文学部研究年報』28
- 三上次男 1984「中国の陶枕－唐より元へ」『楊永徳収蔵 中国陶枕』大阪市立東洋陶磁美術館、のち 1989『中国陶磁史研究』pp.222-238
- 愛宕松男 1987「宋代の文化と陶瓷」『愛宕松男東洋史学論集 1 中国陶瓷産業史』pp.190-221
- 陝西省考古研究所 1992『唐代黄堡窯址』上下 文物出

版社

- 矢部良明 1992『中国陶磁の八千年』平凡社
弓場紀知 1995『三彩 中国の陶磁 3』平凡社
北京大学考古学系・河北省文物研究所・邯鄲地区文物
保管所 1997『観台磁州窯址』文物出版社
小川裕充・弓場紀知 1998『世界美術大全集 東洋編 5・
五代・北宋・遼・西夏』小学館
馮永謙 2000『中国陶瓷全集 9 遼・金・元』上海人民美
術出版社
北京市文物研究所 2002『北京龍泉務発掘報告』文物出
版社
耿宝昌 2002『邛窯古陶瓷研究』中国科学技術大学出版
社 p171
大阪市立美術館 2002『白と黒の競演—中国・磁州窯系
陶器の世界』
彭善国 2003『遼代陶瓷的考古学研究』吉林大学出版社
李紅軍 2003『遼代陶瓷—鑑定与鑑賞』江西美術出版社
河南省鞏義文物保護管理所 2003『黄冶唐三彩窯』科学
出版社
奈良文化財研究所 2003『鞏義黄冶唐三彩』奈良文化財
研究所史料第 61 冊
奈良文化財研究所 2006『黄冶唐三彩窯の考古新発見』
奈良文化財研究所史料 73 冊
飛鳥資料館 2008『まぼろしの唐代精華—黄冶唐三彩窯
の考古新発見』
河南省文物考古研究所、中国文化遺産研究院、奈良文
化財研究所 2009『鞏義白河考古新発見』大象出版社
陝西省考古研究院 2008『唐長安醴泉坊三彩窯址』文物
出版社
神野恵 2010「大安寺陶枕再考」『河南省鞏義市黄冶窯
跡の発掘調査概報 奈良文化財研究所研究報告第 2
冊』 pp.49-76
木村靖二、佐藤次高、岸本美緒『詳説世界史』山川出
版社 pp.163-164
亀井明德 2013「三彩陶枕と筐形品の形式と用途」『中
国陶瓷史の研究』 pp.221-241 六一書房
大阪市立東洋陶磁美術館 2013『定窯—優雅なる白の世
界 窯址発掘成果展』